

千葉県酪農のさと 嶺岡牧講演会

2023年度 第1回

# 「嶺岡紀行」を読んで みませんか！



近代幕開けのエポックメイキングを記した「嶺岡紀行」 船橋西図書館蔵

## 【目次】

解題：驚きの『嶺岡紀行』	日暮 晃一	1
船橋市古文書を読む会の活動状況；『嶺岡紀行』の作者・成立時期・紀行の概要	丹羽 高利	3
岩本正倫の歌と人—背景にあるもの—	横山 鈴子	19
ミニ企画展		
民具に見る牧士の日々～食～		25

# 解題：驚きの『嶺岡紀行』

日暮 晃一

わくわくどきどき過ごして

## I. 嶺岡牧総合調査で思い込みの嶺岡牧像が崩壊

嶺岡牧が横たわる地域は、首都圏にありながら1960年代から過疎化が展開し、現在は地域のアネクメーネ化が進展している。そのため、嶺岡牧は荒れ山に埋もれ、その全体像が捉えられる状態で遺存している。また、八丁の役所が何回か焼け落ちているため、公式な記録である古文書は大きく失ったことが想定されるが、それでも3万点を超える嶺岡牧に関わる古文書・近代文書が残されている。また、食文化をはじめ民俗資料も多く伝えられてきた。

しかし、平成以降の著作物等は、現地、一次資料に当たることなく、類推に類推を重ね、自分の認識に沿って結論を導き出す文藝に終わっており、実態は全く解明されずにいた。「捏造ともいえる類推に類推を重ねずとも、折角、嶺岡牧に関する遺跡や古文書、民俗資料などが遺存しているので、それを調査すれば実態が明らかになる」と考え、2009年から鴨川市郷土史研究会などと協働で嶺岡牧基礎調査を実施した(図1)。この科学調査により、現在みられる嶺岡牧の外周にめぐらされた野馬土手は寛政の牧改革時に造られたもので、牧内には建築物がかなり建っており、牧内を細かく区画する野馬土手はいわゆる勢子土手ではなく放牧を管理する区画であったことや、白牛の飼養は牧内と地域農家との間を行き来する二重構造となっていたこと、嶺岡牧は農民の私有地という概念が形成されてからつく

られた近世牧であり、嶺岡牧の外周をめぐる野馬土手は第1次エンクロージャーメントで囲い込んだ範囲を示すものであったこと、など全く新しい嶺岡牧の実態が次々と明らかになった。また、明治になって展開した第2次エンクロージャーメントは村ぐるみでおこなわれたアジア型類型であり、Hardin(1968)がコモンズの悲劇として指摘した、私的利益が社会目標を犠牲にするヨーロッパ型の発展類型ではないこと、そしてそれはOstromが水利で結ばれた社会での分析を通してコモンズの悲劇を解決する糸口を示したが(Ostrom 2005など)、嶺岡牧ではそれを超えた体系が明治期に展開しており核戦争の無い世界の未来をつくる導きの糸となることが判明した(日暮 2023)。

このように、科学的な調査により嶺岡牧は世界遺産をも超える重要な歴史文化レガシであることが明らかとなるとともに、どの様にしてそれが展開していったのかを追い求めることの重要性が増した。

## II. 岩本正倫が嶺岡牧・酪農・製乳業で切り開いた日本の近代社会

日本の近代化、産業社会の形成に迫る上で、社会の実態で捉えるのか、それとも制度で捉えるかでその認識は全く変わる。日本での産業社会の形成及び産業悪名は明治維新に始まると理解されてきた。しかしこれは、社会の実態に即して制度を適合させた変革にすぎず、社会の実態はすでに産業社会となっていたのである。

『美年岡白牛酪考』<sup>2)</sup>をはじめ、岩本正倫の活動に関する古文書が、岩本正倫によって酪農・製乳業、嶺岡牧で日本を重商主義段階から産業資本主義社会に変えたことを示している。

古墳時代に鉄製農具が使われるようになり、鉄製の鋤先を着けて牛耕・馬耕が始まった。これは、人を多く所有することが富の源泉であった古代社会から、土地所有が富の源泉である中世へと、大きく時代を変えることとなった。3世紀に起こったこの農業革命以降

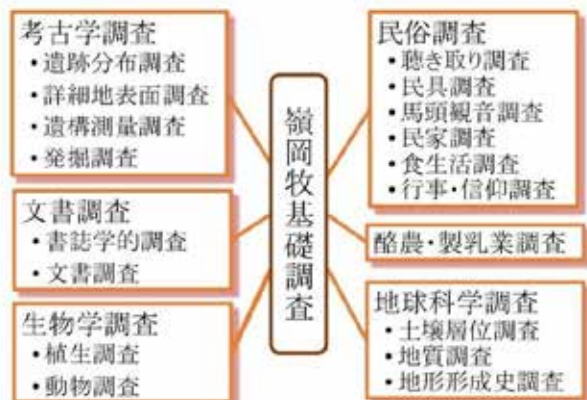


図1 嶺岡牧基礎調査の体系



図2 『白牛酪考』で示した白牛酪産業の展開

URL: [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/unko08/unko08\\_c0302/](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/unko08/unko08_c0302/)

1500年続いた中世社会の幕を閉じ、近代社会の扉を開いた人物が岩本正倫であった。超長期の歴史を変革したオピニオンリーダーを特定できた例は、聞いたことがない。そういう意味で、岩本正倫がそうした変革者であったことと確認できたことは奇跡に近い。

### Ⅲ. 『嶺岡紀行』に記されていた岩本正倫が1500年の歴史を変えた原動力

船橋から嶺岡牧養成講座を受けに来ていた受講生から『嶺岡紀行』が公表されていることを聞かされた。早速Webでの公表をみて驚いた。<sup>1)</sup> まず第1に、幕府の命で嶺岡牧へ見分に赴き、見分中の宿舎とする予定であった嶺岡の役所に着いた晩に不審火で燃え落ちるなどの波乱があったこと。第2に、見分時に感じたことなど公的な記録では記されない心の動きが書き留められていること。そして第3に、江戸幕府が乳製品の醍醐を販売する時の商標といえる嶺岡白牛酪を試作した時の様子が記録されていることである。

嶺岡白牛酪の試作を起点とし、日本社会の近代化が始まった。そこで、a. なぜ岩本正倫は日本の社会を産業資本制へ変革したのか、b. 短期間に①江戸幕府版醍醐販売の許可の取得、②酪農にとり不可欠な生産手段である乳牛を供給する牧場として嶺岡牧のエンクロージャームーブメントを図り、③江戸に官営工場を建てるとともに、④原料乳を搾乳する消費地牧場の設置、⑤乳牛生産牧場から消費地牧場までの輸送網の確立、⑥専売商店網の構築、⑦白牛酪をPRする『白牛酪考』の出版、を行っており、この体系が産業社会形成に他ならないが、嵐のごとく執拗に動いた原動力がどこに

あるのかが問題となる。『嶺岡紀行』にそれが示唆されていたことは、驚きに他ならない。

『嶺岡紀行』では「江戸」と「故郷」を使い分けているが、見分が終わる3日前に故郷から便りが届いて、突然醍醐の試作を行っている。そして、帰り着く直前に家族が死んでいる。『寛政重修諸家譜』に娘の死が記されており、死んだ家族は娘であった可能性が高い。自分のように家族の死に面してほしくないと、当時最高の薬餌といわれていた醍醐、すなわち白牛酪を普及するため白牛酪産業を確立したとみることができる。これはまた、SDGsを先取りしていたと評価できる。

### Ⅳ. 残されている課題

以上のように、嶺岡牧研究にとり『嶺岡紀行』を読み込み、白牛酪産業形成史を変革者の人的特性とマネジメント能力との関係を分析することが重要となってくる。同時に、そうした科学的調査研究を進める体制を地域に構築することも課題になっている。

その点で、『嶺岡紀行』を公表された「船橋西図書館の古文書を読む会」の活動は注目される。丹羽高利氏が「船橋市古文書を読む会の活動状況：『嶺岡紀行』の作者・成立時期・紀行の概要」と題し、その点を示される。

また、『嶺岡紀行』は和歌で綴った紀行文の体裁となっている。しかし、この和歌について文学史的アプローチはこれまでなかった。横山鈴子氏が「岩本正倫の歌と人一背景にあるもの」と題し、この課題に迫る。

(注)

1) 2023年現在、古文書の写真データとその翻刻以外はWeb公表を終了した。Webの原本は、丹羽高利の解説がある船橋市西図書館編(2015)。

2) 岩本正倫による序文の表現。表紙は「白牛酪考」。

#### 【文献】

船橋西図書館編(2015) Q2003 嶺岡紀行, 船橋市西図書館所蔵史料 集第八集 嶺岡紀行・浜路のつと・式笑人成田参詣全・安房雑集, pp.1-22.

Hardin, Garrett (1968) The Tragedy of the Commons, *Science*, 162(3859), pp.1243-1248.

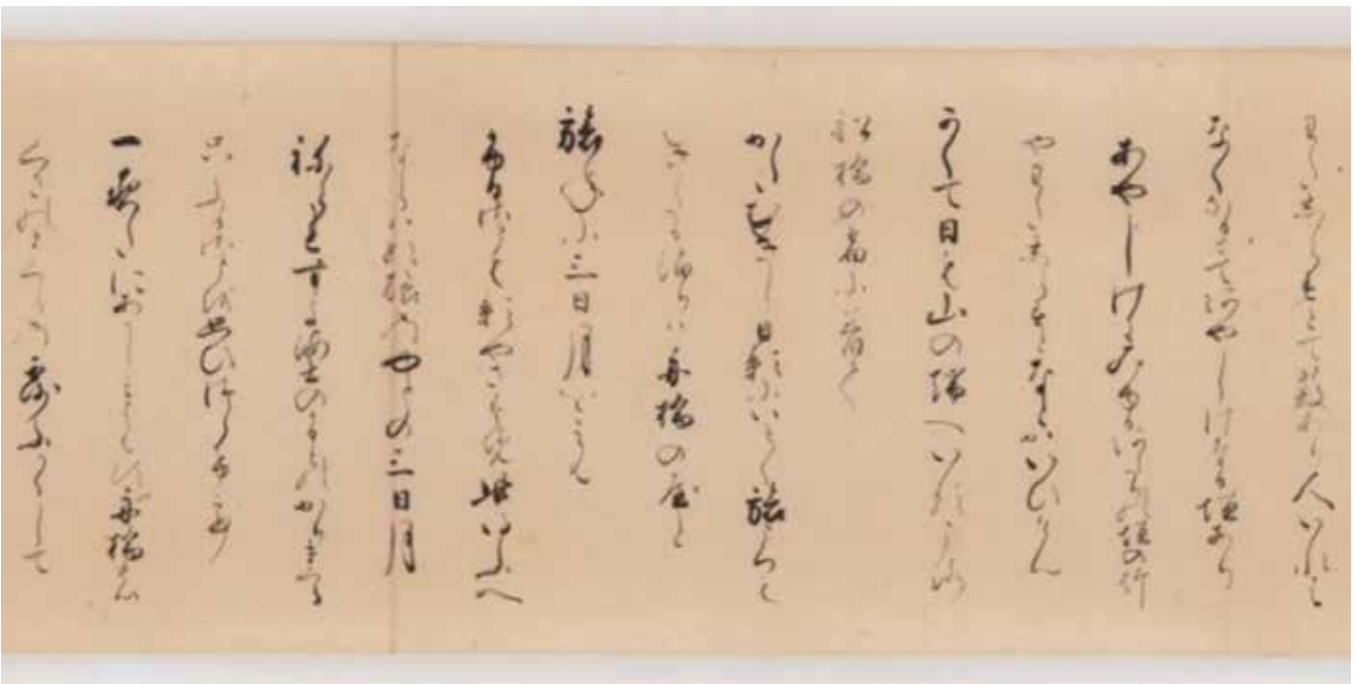
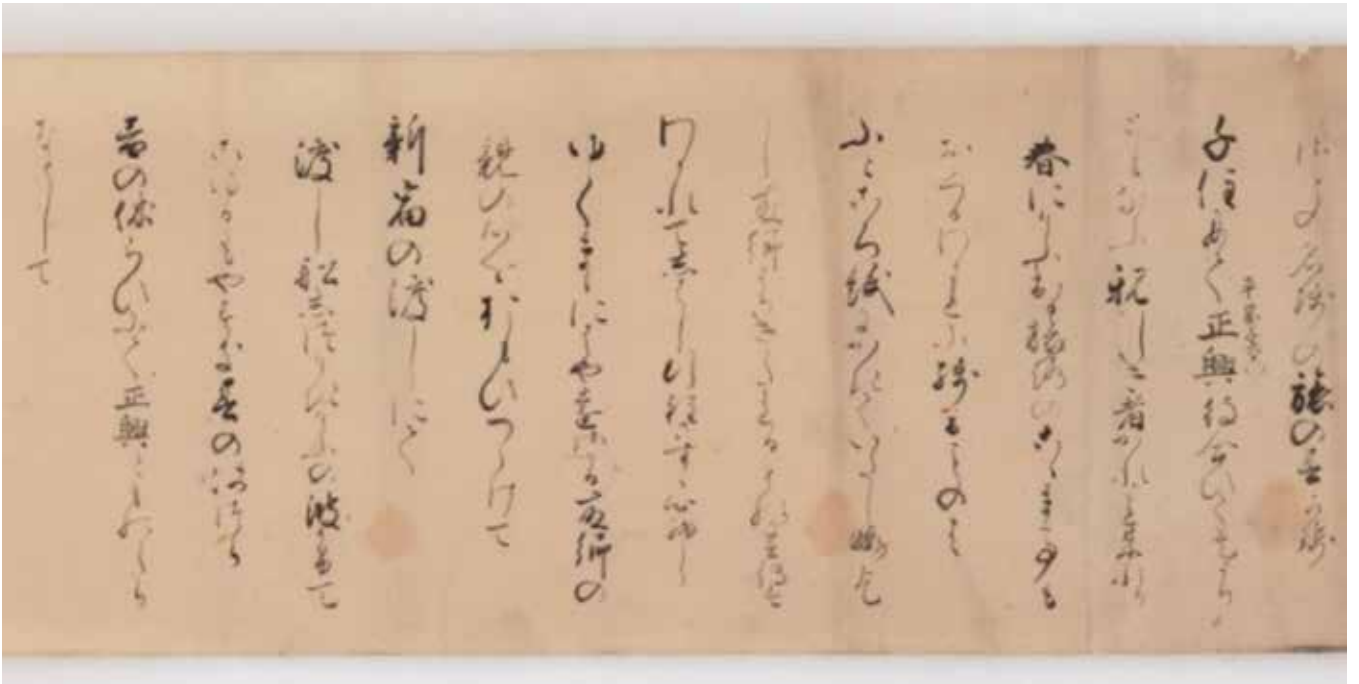
日暮 晃一(2023) アジア型近代化遺産である嶺岡牧, 千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会2022年度第2回 人類の宝「嶺岡牧」要旨, pp.7-12.

Ostrom, Elinor (2005) *Understanding Institutional Diversity*, Princeton University Press, 355p.

# ア船橋市古文書を読む会の活動状況；『嶺岡紀行』の作者・成立時期・紀行の概要

丹羽 高利

船橋市西図書館の古文書を読む会





今一信は公あつては  
 津牧場にて立止らる  
 三日御日におまはる  
 父君母君  
 のもいふのことも  
 御殿を拝して  
 御殿の  
 御殿の

市川の雲に閑此のり  
 武太の名の砂といひ  
 市川の雲に閑此のり  
 武太の名の砂といひ  
 市川の雲に閑此のり  
 武太の名の砂といひ  
 市川の雲に閑此のり  
 武太の名の砂といひ  
 市川の雲に閑此のり  
 武太の名の砂といひ  
 市川の雲に閑此のり  
 武太の名の砂といひ

じー波ののまのまづ  
 神ー浦ーりふふにひひ  
 松山あふふ葉のあ嵐のあひ  
 すま  
 珠のすも神ー浦あに  
 こひし道のあふふ  
 つくてし程父正利のあふ  
 ちう八幡の社（活て）  
 ちあふふふふれじし  
 洋ーて社とめくうむのあふ  
 にまーやふふ  
 あらまー社とめくうむの  
 波さうなる松のあふ  
 姉と波のあにふ

井のあふぬく田ふふ  
 海ふまふ井ふふふふ  
 つふふのけふふふ  
 市場の波ー漢ふ松ふ  
 ー  
 つふふふふふふふふ  
 市場の漢ふ波のふ風  
 つくてし程海さふふ  
 なるて波・田ふふふ  
 やふふふふふふふふふ  
 漢ふふふふふふふふ  
 ちうく山さふふふふ  
 ちうふふふふ  
 ちうふのふふふふふふ  
 いふふふふふふふ

日よしの春をまぐりし

うららかなる海邊の梅見

はなはたしの沖波をうら

野汐ふいはなをまぐりに

けり

山をこぼれ入るのうら

らかなる海邊の梅見

けり川村の汀をまぐりに

うららかなる海邊の梅見

海つらに美をまぐりに

うららかなる海邊の梅見

春川村白く大の梅見

うららかなる海邊の梅見

よにまぐりし海邊の梅見

梅見の春をまぐりに

うららかなる海邊の梅見

大日咄はるをまぐりに

うら

梅見の春をまぐりに

うららかなる海邊の梅見

春川村の汀をまぐりに

うららかなる海邊の梅見

海つらに美をまぐりに

うららかなる海邊の梅見

うららかなる海邊の梅見

春川村白く大の梅見

うららかなる海邊の梅見

よにまぐりし海邊の梅見

よにまぐりし海邊の梅見

嶺岡の東へ流るる水は清く  
 涼しくして夏は涼しく  
 木の根坂の川は清く  
 涼しくして凡そ川に水入町  
 なるも水は清くして木の根  
 にも清くして木の根坂と  
 なるなり  
 川の清くして木の根坂  
 なるなり  
 山の越えたる川は清く  
 涼しくして夏は涼しく  
 木の根坂の川は清く  
 涼しくして凡そ川に水入町  
 なるも水は清くして木の根  
 にも清くして木の根坂と  
 なるなり

見せしむるに中て火は清く  
 涼しくして夏は涼しく  
 木の根坂の川は清く  
 涼しくして凡そ川に水入町  
 なるも水は清くして木の根  
 にも清くして木の根坂と  
 なるなり  
 川の清くして木の根坂  
 なるなり  
 山の越えたる川は清く  
 涼しくして夏は涼しく  
 木の根坂の川は清く  
 涼しくして凡そ川に水入町  
 なるも水は清くして木の根  
 にも清くして木の根坂と  
 なるなり



竹黄の油あり西風  
 けなれいじまの山風の  
 次  
 六日志ののち西風と  
 海ふりしゆりもてはく  
 本の松坂より神の御前  
 すぐいさ  
 西へいさく山吹の松  
 こころ本の松の坂とをり  
 谷へゆくなりありこころ  
 りらて向ひのあか  
 遠なる山吹の松の  
 所のよのい  
 本のよのい  
 ずきり

従者ふくく  
 何ぞ所とあふ  
 本の民もて  
 鳴りもなり  
 土場を  
 取ふなり  
 くら火あやう  
 なる  
 へん  
 谷  
 中  
 何ぞく物  
 何ぞく物





遊ねる。暫してかの釣船に  
 に入。小舟はひまじく駛りぬ  
 方ゆへに人々逃げにけり  
 かの〜一軒家ありいへば  
 人々あ〜い〜い〜  
 釣船とせし始に〜  
 心よの心よ 釣船有るは  
 嶺岡山より夕雲の影まじり  
 夕日こひ赤の空の〜  
 嶺岡山より〜  
 舟に先出り〜  
 舟の  
 若狭より〜  
 嶺岡山あり〜の月にて

十八日西海の小舟に極る  
 舟日夜にのたり首くいはれ  
 舟の〜  
 毎に〜  
 十六日今日舟津馬橋に  
 きてるなり  
 十七日折本牧より〜  
 釣船〜舟先出りに  
 山原の氏中舟に遊ばれ  
 舟は〜  
 舟は〜  
 廿日〜  
 舟の〜  
 舟の〜







今昔一もふりてはなれ  
 十八日ふりてのつとむは馬  
 をそとへて下へ揚りしに  
 一ここれより神指の  
 ちんちんちんちん物乃は  
 ちんちんちんちん  
 先法をふりてすまの  
 ちんちんちんちん  
 十九日志のちんちんちんちん  
 おくし殿・蔵とす計のの  
 ちんちんちんちんちんちん  
 人ちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 廿日秘者ふりていふの

いふ秘者の風のちんちん  
 是より秘者ふりて  
 若秘者ちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 廿二日志りて洞秘者ちんちん  
 秘者秘者ちんちんちんちん  
 兼ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 廿三日けりて秘者ちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん

なる松を見く 藤若松とて  
 なる  
 十日(一) 藤若松の松とて  
 みる 藤若松の松とて  
 廿七日 朔(一) 藤若松の松とて  
 文も多沙(一) 藤若松の松とて  
 海(一) 藤若松の松とて  
 情(一) 藤若松の松とて  
 汗殿の(一) 藤若松の松とて  
 なる 中(一) 藤若松の松とて  
 有師の(一) 藤若松の松とて  
 なる 藤若松の松とて  
 なる 藤若松の松とて  
 なる 藤若松の松とて

長風の吹ふ 今井とて  
 うまける 今井とて  
 け(一) 今井とて  
 帰(一) 今井とて  
 主(一) 今井とて  
 なる 今井とて  
 廿九日(一) 今井とて  
 朔(一) 今井とて  
 なる 今井とて  
 なる 今井とて  
 なる 今井とて  
 なる 今井とて  
 なる 今井とて



うらに越くわし舟を引て  
さあしは軒のくさし  
うらに越くわし舟のほ  
うらに越くわし舟のほ

日殺にや

かみ日廿日

廿六日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

さあしは軒のくさし  
佐野村川とく  
帰らへんや

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

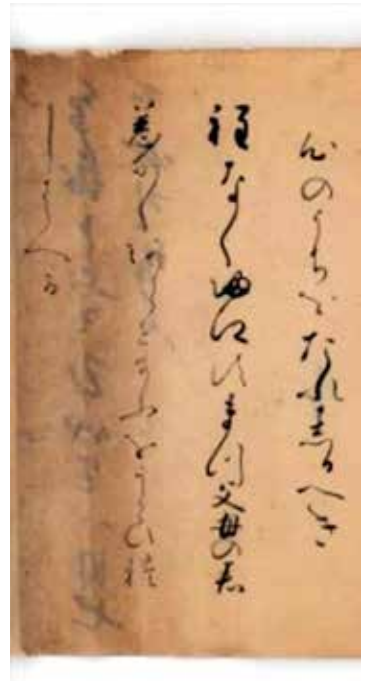
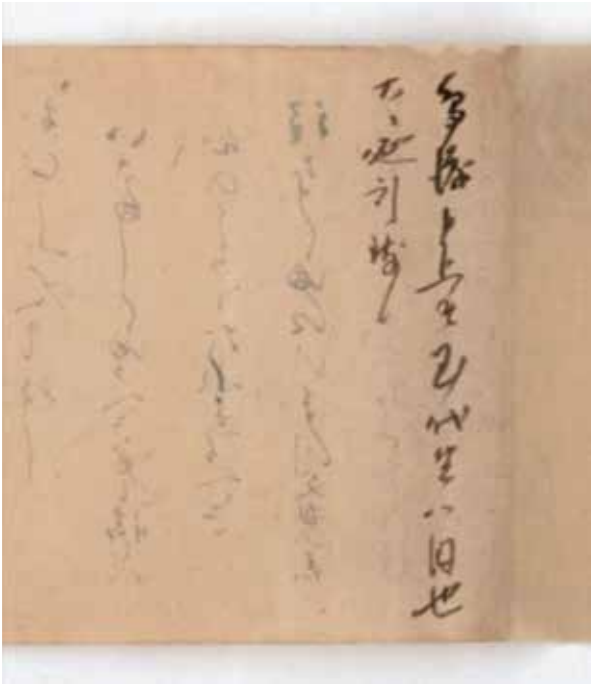
かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日

かみ日廿日



神——に氷るん

う——な——は——し——は——

ち——神——の——掛——

八幡の海——に——付——の——の——

う——し——は——は——は——は——

り——と——し——

た——と——ま——し——し——し——し——

弦の——う——森——も——と——ま——よ——

三月約日八幡のあ——

は——し——あ——あ——の——村——

あ——は——は——は——は——

子位へ取ふは——

特じまのあ——あ——あ——

あ——は——は——は——

い——は——は——は——

# 岩本正倫の歌と人

## 一背景にあるもの一

横山 鈴子

東洋大学大学院文学研究科

### I. はじめに

丹羽高利 (2015)<sup>1)</sup>によると、船橋市西図書館が所蔵する仮表題「Q-203 (下総紀行)」(巻物、縦 17.5 cm、横 1128.5 cm) は、古書店より納められもので、元々の保管者・保管場所などの出自は不明であったが、船橋市西図書館古文書会による翻刻により、安房国嶺岡牧への紀行文であることがわかり「嶺岡紀行」とあらためたとされる。作成者は、江戸幕府旗本岩本<sup>まさとし</sup>正倫 (\*『寛政重修諸家譜』による) で、文中の「父正利」, 「父の知る所 (=知行地) を通り八幡の社に詣で」等の記述から推察確定したとされる。更に、日付と暦の照合と、平岡与右衛門正興と岩本が同時期に小納戸であった時期 (1787(天明 7) 年~1794 (寛政 6) 年) と暦の一致により、成立年代を 1792 (寛政 4) 年と確定し、1794 (寛政 4) 年閏 2 月 3 日~29 日約 1 ヶ月の旅の記録である、とされた。

この「嶺岡紀行」の作成者、幕府旗本の岩本正倫は 1792 (寛政 4) 年嶺岡の白牛の乳から白牛酪を作ること成功した人物であり、同時に牧改革に取り組み、報恩碑・岩本大明神ともなっている人物である。<sup>2)</sup> 岩本正倫の歌をよむにあたり、鎖国政策下に「吉宗が輸入した」という白牛の口碑についての先行研究も概観し、残された史料から、岩本正倫の背景にあるものを俯瞰した上で、近代化のはじまりを考えつつ、<sup>3)</sup> 岩本正倫の歌集「嶺岡紀行」を読んで行きたい。

### II. 岩本正倫について

#### 1. 『寛政重修諸家譜』<sup>4)</sup> 及び『徳川実記』<sup>5)</sup> の記述

『寛政重修諸家譜』と『徳川実記』(\* ( ) にて表示) の記述から岩本正倫に関する記事を以下に抄出する。

『寛政重修諸家譜』:

1773 (安永 2) 年 3 月 25 日、俊明院 (家治) に拜謁。  
1776 (安永 5) 年 12 月 19 日御小性組 17 歳 (1761 年生

／宝暦 11)

1777 (安永 6) 年 11 月 19 日御小納戸、  
12 月 18 日布衣、放鷹のとき供奉、鳥を射て時服三領たまふ。

1787 (天明 7) 年 8 月 2 日御小納戸頭取格

12 月 18 日従五位下石見守に叙任

1792 (寛政 4) 年 5 月 15 日御小納戸頭取

1794 (寛政 6) 年 12 月朔日御先鉄炮頭

1795 (寛政 7) 年 12 月 16 日先に敬之助(家治子)君生誕のとき父正利墓目の事を承り、正倫は矢取の役を勤めしにより時服三領、白銀三十枚をたまひ、御台所 (家齊室近衛氏をよび敬之助君よりも巻絹をたまふ。のち綾姫 (家齊女) 君誕生の時もこのことつとめてたまものあり。

(『徳川実記』12 月「十日此日男御子生れさせ給ふ。御腹はおうたの方。御臺目留守居岩本内膳正正利。矢取の役其子先手筒頭岩本石見守正倫。」)

(『徳川実記』12 月「十六日 御台所御着帯御祝として。」「墓目の役奉はりし留守居岩本内膳正正利。矢取の役勤めし先手筒頭岩本石美守正倫」)

『寛政重修諸家譜』1797 (寛政 9) 年 5 月 19 日

駿河国駿東富士両郡におもむき、牧場を巡見せしにより黄金五枚たまふ。

(『徳川実記』5 月「十九日先手筒頭岩本石見守正倫。駿河国牧場とり立の事奉はりしにより金五枚褒賜あり」)

『寛政重修諸家譜』1798 (寛政 10) 年 2 月 9 日

新番の頭に転ず。この日かつてあづかりし牧場のことをゆるされ、累年その事に勤勞せしを賞せられて時服二領、黄金三枚を恩賜せらる。

(『徳川実記』2 月「九日先手筒頭岩本石見守正倫新番の頭となる。これまで奉はりし野馬は御ゆるしあり。同じ事心いれしによて金時服を賜ふ」)

『寛政重修諸家譜』妻は曲淵一大夫勝周が女。

◎なお、岩本正倫家の史料はみつかっておらず、岩本正倫家史料は船橋市図書館所蔵の「嶺岡紀行」のみで



ある。幕藩体制の崩壊とその後の混乱で、旗本家史料の残存は少ない。

## 2. 『徳川実記』及び『旧高旧領取調帳』<sup>6)</sup>の記述

『徳川実記』及び『旧高旧領取調帳』岩本家代々についての記述がある。

『徳川実記』によると、岩本氏先祖は紀伊大納権言頼宣に仕え頼宣孫吉宗が8代将軍となり、それに伴い御家人となり廩米300俵を与えられ小姓となる。正利の時1782(天明2)年500石を賜い、1787(同7)年1000石、1797(寛政9)年2000石知行を賜う。正利の娘お富は11代将軍家斉(一橋治済の4男)の生母であったので、正利は将軍家斉の祖父にあたる。

『旧高旧領取調帳』によると、上総国市原郡八幡村は幕府領・八幡社領・旗本七氏(松本・村上・岩本・水野・永井・河野・佐野)の相給所領となっており、岩本内膳正204.8520石とある。丹羽高利(2015)によると、正倫の父正利が1788(天明7)年同村に知行地を与えられて以降幕末まで代々知行地であり、市原市海保村(124石)も所領していたとされる。

## 3. 岩本家屋敷と野馬方役所

### (1) 寛政期の牧改革

岩本による寛政期の牧改革は幕閣のみならず、村人にも受け入れられ報恩碑・岩本大明神となっている。その牧改革の推進は将軍御側申次加納遠江守久周<sup>ひさのり</sup>によって進められる。この遠江守久周は9代将軍家重の側用人を勤めた大岡出雲守忠光の二男であった。忠光は言語障害があったと<sup>7)</sup>いわれる家重の唯一の言語理解者であったという。

### (2) 野馬方役所

「野馬方諸事元決極書抜」<sup>8)</sup>によると、1793(寛政5)年石見守は自宅内に「野馬方役所」を作りたいと願い出て、遠江守(久周)に許されている。

一房州総州牧々一手ニ取扱被 仰付候付而は、支配之者相詰候場所之儀は、野馬方役所と唱候様仕度、且牧場筋之儀ニ付、野附付村々之百姓共、願出候類相糺候場所無之候而は、差支候儀ニ付、**居屋敷之内建直シ、住居替品々勘弁仕候得共、父子勤之儀御役柄ニ而は甚手狭ニ而、難渋仕罷在候上、石見守儀右御用向被 仰付候ニ付、取扱候者差置**

候場所無之、添地被下置候様奉願候処、野馬方役所と唱候儀は御聴置、且添地被下置候間所は見立、**内膳正**より相願候様被仰渡候旨、寛政五丑年十一月七日兵部少輔殿被仰聞候由、**遠江守殿**申聞候ニ付、内膳正奉願巢鴨ニ而、添地被下置、**隣家と相對替仕、右地面江野馬方役所、并、厩向懸り家来、差置候住居等迄、此度は先自分入用ニ而補理候段申上置候事**(句読点筆者記)

### (3) 岩本家屋敷

次の切絵図3点は旗本岩本家の代々の屋敷であろうと思われる「永田町」地域のものである。図1は、1759(宝暦9)年「永田町絵図」<sup>9)</sup>では「岩本内膳」とある。前掲史料から、正倫の父は「内膳正」である事が分かるので、父に給された屋敷であろう。図2は、1847(弘化5)年「永田町絵図」<sup>10)</sup>で同じ場所に「岩本大隅守」とある。図1の隣家「兼松三十良」の屋敷名は無い。「兼松三十良」の相対屋敷を巢鴨近辺の絵図に見つけることは出来なかったが、岩本が遠江守の采配によって敷地を広げていると考えられる。図3の1850(嘉永3)年「外桜田・永田町絵図」<sup>11)</sup>も同様であり、この頃岩本家当主は「大隅守」を任じられ「岩本大隅守」と名乗っていたと考えられる。

雉子橋の「野馬方役所」以前に自宅の永田町12)の屋敷を広げて使っていたと思われる。

## Ⅲ. 吉宗によるインド産白牛3頭輸入の口碑について

嶺岡牧の白牛は、吉宗がインドから輸入したもの



図1 1759(宝暦9)年「永田町絵図」

斎藤直成編『江戸切絵図集成』1(中央公論社、1980、p31・32)



図2 1847(弘化5)年「永田町絵図」

斎藤直成編『江戸切絵図集成』2(中央公論社, 1981, p16)



図3 1850(嘉永3)年「外桜田・永田町絵図」

斎藤直成編『江戸切絵図集成』4(中央公論社, 1982, p21・p22)

だという話が伝わっている。ここでは、関連史料・先行する研究・洋学研究から見ていきたい。

#### 1) 『徳川実記』<sup>12)</sup>の記述(1792(寛政4)年)

六月廿六日(略)これよりさき享保の頃有徳院殿白牛三頭を安房国嶺岡に放たしめられしが。蕃息して。今年すでに七十頭におよぶ。よて小納戸頭取格岩本石見守正倫に命ぜられ。かしこに行て牛乳を求められ。数石を得て遂に白牛酪を製せしめらる。また桃井源寅に命じて守治効能を撰ばしめて。廣く生民を恵恤あり。

#### 2) 「白牛酪考」<sup>13)</sup>の記述(寛政四年六月岩本正倫序, 幕府侍医桃井源寅著)

徳廟。至仁物ヲ愛シ。夙夜生靈ヲ念ト為。富庶教養之外。又其夭札矢瘠癘ヲ憂ヘ。凡菓物ノ城外自来ル者。人参縮砂之類。皆其根苗種子ヲ微ス。之内地ニ植。民用以贍ス。且于人ニ白牛酪ノ益アルヲ居多タルヲ聞。天下ニ購求ス。當時僅ニ三頭ヲ獲。乃此於之放命メ。繼テ而 黄門悠然公ニ頭ノ乳ヲ請テ歳コトニ取。以醍醐ヲ製ス。厥ノ後日ニ孳息ス。今正倫カ見所。至七十余頭。」(筆者書き下しによる)

『徳川実記』及び「白牛酪考」にはインド産白牛の記述はみられない。

#### 3) 先行する研究・自治体史等

『安房酪農百年史』(1961)<sup>14)</sup>では輸入先はわからないが白牛を輸入とし、荒居英次(1962)<sup>15)</sup>は史料がないが充分推測しうる、とし、野村泰三・渡辺誠(1969)<sup>16)</sup>は輸入を否定、加茂儀一(1976)<sup>17)</sup>はオランダから輸入と述べている。近年の『鴨川市史』(1996)<sup>18)</sup>では「1727(享保12)年吉宗がインド産の白牛3頭を購入し嶺岡牧に放って繁殖を進めたと伝えられている。御小納戸頭取岩本石見守正倫が、白牛調査のため嶺岡牧に赴いた寛政4年当時には、白牛は70頭ほどに繁殖増加している。」と述べ、『千葉県の歴史』(2007年)<sup>19)</sup>は「1734(享保19)年には輸入した白牛(ゼブー種)を放逐し、その飼育を開始した。放牧した輸入牛馬の飼育には細心の注意が払われ」とある。

#### 4) 洋学史研究

岩生成一(1980)<sup>20)</sup>、片桐一男(1995)<sup>21)</sup>は吉宗による嶺岡のペルシャ馬の輸入について述べるが、白牛の記述は無い。今村英明(2007)<sup>22)</sup>が翻刻したオランダ商館日誌にも白牛の記述はみつからなかったが、同書に吉宗へバター<sup>1)</sup>の提供をし、翌日更に所望されたという記述があり、吉宗が好んで食していたことは確認できる。

1729年3月28日 月曜日江戸参府 本日将軍向けにバター<sup>1)</sup>booter, 10 テール thailen (100 匁) と燻製肉を1切れ提供した。

1729年3月29日 火曜日江戸参府 本日将軍向けにバター<sup>1)</sup>booter, 10 テール thailen (100 匁) 即ち3/4ポンド所望された。

鎖国体制の江戸時代にあつて、中国からの唐物輸入はさかんであつた。中国からのインド牛輸入というこ

とがあったのではないかと考えている。

なお、近世における牛乳の推奨について、宮地正人(2007)<sup>23)</sup>が佐藤信淵(1769～1850)が嶺岡の幕府牛牧場について知悉しており乳幼児の保育に牛乳が有効と説いている<sup>24)</sup>と、指摘している。(→近代化のはじまり?)

#### IV. 「嶺岡紀行」の歌

##### 1. 近世後期の和歌

近世前期の和歌は、公家(飛鳥井家等)によって、家業の和歌伝授指導がおこなわれる。詳細はわからないが武家であった岩本は師匠について和歌を習得していたであろう。

19世紀前半(文化文政期)には、武士以外に僧侶・神職・医師・豪農商に和歌がひろがり、国学者が和歌を全国から集めて刊行するようになる。本居宣長門下の加納諸平は文政11(1828)年『類題鯁玉集』<sup>25)</sup>を刊行、京阪地域では長沢伴雄が『類題和歌鴨川集』<sup>26)</sup>を刊行(9000首)している。<sup>27)</sup>

「嶺岡紀行」は、これより少し前の時期にあたる。同時期に、江戸狂歌は明和6(1769)年頃の狂歌会に始まり大田南畝(1749～1823)の活躍もあり、『万歳狂歌集』出版(天明3/1783年)の頃には大流行となる。狂歌は和歌に対して漢語や俗語を交える、おかしみ、はったりや冗談を歌い込んだもの。世相批判も含まれる。<sup>28)</sup>

高橋章則(2023)<sup>29)</sup>は代官手代を媒介として1718(享保3)年より1860(安政7)年に至る飛騨高山の狂歌集の出版事例や、僧・武家・女性・酒屋などの人々が師匠のもとに集う刷物(天保3年)が紹介されており、地域狂歌の全国的拡がりも予知できる。田中優子(1989)<sup>30)</sup>は18世紀の全国の「連」により貴賤の別無く各層へ拡がったことを述べている。岩本正倫が狂歌を通じてこれら様々な層の集まりに触れていた可能性は充分考えられる。

##### 2. 「嶺岡紀行」の歌

「嶺岡紀行」について、丹羽高利(2015)が述べる疑問箇所、及び、「嶺岡紀行」への自分なりの感想などを述べたいと思う。

① 巻末裏に「鳥渡申上候、玉代金八円也、右者 延引致 候」と墨書がある。米谷博(2013)<sup>31)</sup>遊女代(玉)は600文とあり、玉代は遊女代と思われる。

いつの時代かわからないが、「嶺岡紀行」を持っていた人物(不明)が遊女代の延引のために借金の方に渡したのではないか。

② 署名は無いが、歌の内容から岩本正倫の「嶺岡への紀行詠」であり、状況の一致から歌の作者は岩本正倫であると読むのが最良と思われる。ただし、作成者と所蔵者は異なるかもしれない。

③ 93首とあるが94首と考えてみた。(作成者は歌は位置を少しさげているので93首とみなしていたと思う)

④ 「嶺岡紀行」の内容は和歌とその詞書きという印象であるので、紀行文と言うよりも「歌集」の色彩が濃い。

⑤ 武士岩本の歌から嶺岡牧の村人の村落共同体の暮らしや、牧士・駒捕が垣間見える。

⑥ 岩本の歌の基本は古典をふまえた正統派和歌である。2首狂歌がある。自らの用向きでもある重要な場面を狂歌で歌ったことの意味は重い。

##### 3. 「嶺岡紀行」の歌を読む

(朱印) 可不盡心守

今とし仰ことを蒙りて嶺岡の御牧場にて立ぬ、比はのちのきさらき三日、朝日の影長閑にて門出もいさまし、父君母君にまかり申とて

・のとけしなけふの門出もめくみもて行嶺岡のきさらきのみち

千住にて正興待合(加筆「平岡与右衛門」)ひて是よりともなふ、親しき者かれこれ来れり

・春にけふ出る旅路のこゝまでもおくるわかれに残ることのは

新宿の渡しにて

・渡し船しつけきけふの波かけてこゆるもやすき春の河つら

昼の休らひにて正興とものかたりなとして

・いさましく語る中にも思ひやるやとの名残はおなし心に

かくて行程に真間鴻の台、遥にみる、いにしへの里見氏の古城なりと聞て

・武士の名のみ残りていにしへのあととふ人もまれのふるみち

市川の関には関守ののりものゝ戸をあけよいふ、戸はあけず、すたれそあけたる、渡し舟おそし

→何人の預り所と尋るに伊奈氏<sup>32)</sup>の守る所といへり

(94 首目?)

・関守も何とか思ふ市川やいなにもあらぬおそき舟出  
は旅ねに三日月をみて

・ふるさと影やさす覧此ゆふへならはぬ旅のやとの  
三日月

・ねられすに海士のかるもの<sup>33)</sup> かりまくら只ふるさ  
とを思ひつゝけて

・一夜たにあかしもはてす舟橋はくさのまくらの露ふ  
かくして

四日、この宿を出て行に

・うらゝかにむかふ海辺の朝日影さす塩みつる沖つ春  
かせ

同じ所にてこの比駒の生れしときけは、まかりてかの  
駒を撫愛れは、母なる馬の恐れて退ぬるか、暫してか  
の駒を放すに、人々に随ひまとひて親馬の方へゆかす、  
人みな退けはまた本のことく一所に寄あひけるを人々  
あはれかりける

・駒さへも生し始はすくなるをひとの心よ斯そ有へき  
白牛の乳は御薬になりぬれは其こゝろみせんと心を尽  
す

・いそけとも牛のあゆみの遅ければ千里のみちをい  
かゝひくへき

故郷のかたへ引かへらんまでも、まつ此所にてその乳  
の効を試みんとて、夜更ぬるまで色々調して、から  
うして漸酪の形になしぬ、**狂歌**

・手を尽し世上の人のたすからはこれより上のあんら  
くはなし

千住の駅に休らひしか慎む事のある故、ふるさとより  
出むかふ人もなし

・いさましく帰るへき身も慎みの心のうちをたれかし  
るへき

程なく帰郷す、まつ父母の君恙なくあらせ給ふをう  
かゝひ、礼しはへる

最後の歌の「慎みの心のうち」の真意はわからない。  
宿舎の陣屋（八丁陣屋）の火災が連想される。（以下の  
詞書きによる）

33 番目の歌の詞書き「火あやうし」

34 番目の歌の詞書き「火いてきぬ」「謹て文書て  
江都に告申す」

50 番目の歌の詞書き「かの焼亡のこと・・・江都  
より仰くたりをかしこまりて」

80 番目の歌の詞書き「さてきのふ故郷の方より謹む

べき事もはへれは、帰郷すも 御殿のことは用捨有  
るへきとの事んれば」

93 番目最後の歌の詞書きの「ふるさとより出むか  
ふ人もなし」

なお、もう一点、この時点では白牛酪を土産に持ち  
帰れなかったゆえとの推察もできる。（前述、Ⅲ1）の  
徳川実記に「かしこに行て牛乳を求められ。数石を得  
て遂に白牛酪を製せしめらる。」とある）。この後、  
直ぐに将軍に献上し商品化に成功することとなる。

## V. おわりに

以上、拙いながら思いつくままに、「嶺岡紀行」と岩  
本正倫について述べてきた。宮地正人(2021)<sup>23)</sup>は「近  
代化」とは「民主的・進歩的」であり「反封建的」で  
あるかどうか、という視点からの研究の必要性を指摘  
している。岩本正倫は、封建制社会において「反封建  
的」「民主的・進歩的」志向を希求しようとした人物で  
はなかったか?というのが、彼の行った牧改革への姿  
勢と歌を通しての感想である。

本報告にあたり、歴史研究及び和歌研究の著書から  
様々に勉強をさせていただいた。嶺岡牧の白牛酪、及  
び岩本の自宅内の野馬方役所について歴史研究者の  
方々は様々に<sup>35)</sup> 研究を進め言及されていて勉強させ  
ていただいた。近世和歌についても文学研究者の著書  
から勉強させていただいている。力不足で言及には至  
らなかったが、記して御礼といたしたい。

(註)

- 1) 『船橋市西図書館所蔵資料目録第二集』(船橋市西図書館, 1987), 『船橋市西図書館所蔵史料集第八集』(同, 2015)。
- 2) 白石典子「酪農を近代産業にした岩本正倫」(NPO 法人エ  
コロジー・アキスチブ 編『千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会 2021 年  
度第 1 回日本近代酪農の変革者—安房酪農のルーツに迫る  
—要 旨』千葉県酪農のさと, 2021)。
- 3) 日暮晃一「アジア型近代化遺産である嶺岡牧」(上同, 2022  
年度第 2 回人類の宝「嶺岡牧」要旨, 上同, 2022)。
- 4) 『寛政重修諸家譜』19(続群書類従完成会, 1981, p118-120)。
- 5) 黒板勝美編『国史大系 徳川実記続 1 新訂増補』(吉川弘  
文館, 1991, p186, P300-301, P354, P372)。
- 6) 『旧高田領取調帳』関東編(木村礎, 近藤出版社, 1696),  
及び国立歴史民俗博物館データベース。
- 7) 松戸市誌編さん委員会編『松戸市史』中・近世編(松戸市  
役所, 1978, p220)。

- 8) 白井町史編さん委員会編『白井町史』史料集 I (白井町, 1984, p293, p337)。
- 9) 斎藤直成編『江戸切絵図集成』1 (中央公論社, 1980, p31・32)
- 10) 斎藤直成編『江戸切絵図集成』2 (中央公論社, 1981, p16)。
- 11) 斎藤直成編『江戸切絵図集成』4 (中央公論社, 1982, p21p22)。
- 12) 註 5) に同じ。
- 13) 国立国会図書館デジタルアーカイブ『白牛酪考』徳 1-906。
- 14) 金子精一編『安房酪農百年史』(安房郡畜産農業共同組合, 1961)。
- 15) 荒居英次「徳川吉宗の洋牛馬の輸入とその影響」(『日本歴史』174, 1962)。
- 16) 野村泰三『日本乳製品小史』(有隣堂, 1969, 渡辺誠草稿第 3 章)。
- 17) 加茂儀一『日本畜産史』(法政大学出版局, 1976)。
- 18) 鴨川市史編さん委員会編『鴨川市史』通史編(鴨川市, 1996, p365)。
- 19) 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』通史編近世 1 (千葉県, 2007, p759)。
- 20) 岩生成一『明治以前洋馬の輸入と増殖』(財団法人馬事文化財団, 1980)。
- 21) 片桐一男『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生一外つ国の言葉をわがものとして』(丸善株式会社, 1995)。
- 22) 今村英明『オランダ商館日記と今村明生』(ブックコム, 2007, p249)。
- 23) 宮地正人「佐藤信淵と房総」(『千葉史学』51, 2007, のち『歴史のなかの『夜明け前』平田国学の幕末維新』吉川弘文館, 2015 所収, P415)。
- 24) 佐藤信淵「経済要録」巻 12, 文政 12 年著作, 安政 6 年出版(瀧本誠一編『佐藤信淵家学全集』上, 岩波書店, 1925, p879) 佐藤信淵「垂統秘録」安政 4 年(瀧本誠一編『佐藤信淵家学全集』中, 岩波書店, 1926, P441)。
- 25) 加納諸平編『類題鮫玉集』文政 11 (1828) 年他(稲葉文庫)。
- 26) 長沢伴雄編『類題和歌鴨川集』(クレス出版, 2006)。
- 27) 宮地正人『幕末維新変革史』上(岩波現代文庫岩波書店, 2018, p142-144)。
- 28) たばこと塩の博物館編『大田南畝の世界』(たばこと塩の博物館, 2023)。
- 29) 高橋章則(第 95 回民衆思想研究会飛騨高山大会報告 2023 年 8 月 26 日「「接ぎ木」される文化—高山と狂歌—」)
- 30) 田中優子「「連」が作る江戸—八世紀—行動本草学から落語まで」(『江戸の想像力』筑摩書房, 1989)。
- 31) 米谷博「利根川下流域の河岸遊郭と地域社会」(佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 1—三都と地方都市』吉川弘文館, 2013, p266-267)。鳥飼家史料の中に「玉」=遊女代と思われる「玉」がある。
- 32) 村上直『江戸幕府の代官』(新人物往来社, 1970)。
- 33) 海人の刈る藻: 海人の刈り取る海藻, 「乱る」の序詞として用いる。「古今和歌集」「伊勢物語」など, 太田垣蓮月の歌集名。
- 34) 宮地正人『幕末維新変革史』上(岩波書店, 2012, vi 頁)。
- 35) 岩下哲典「近世文書研究会活動報告」(『史友』15, 青山学院大学史学会, 1982)。大谷貞夫「金ヶ作陣屋考」(鎌ヶ谷市史研究, 1988, のち, 遺稿集刊行委員会編大谷貞夫『江戸幕府の直営牧』(岩田書院, 2009 所収, P51-54, p110, p129, p199-200, p265, P282 など)。久留島浩「牧士」(久留島浩編『近世の身分的周縁 5 支配を支える人々』, 吉川弘文館, 2000, p142)。





2023 年度第 1 回嶺岡牧ミニ企画展

# 民具に見る 牧士の日々～食～



千葉県酪農のさと酪農資料館第3展示室

2023年4月15日(土)～8月31日(木)

開館 9:30～16:30 月曜休館 入館無料

千葉県酪農のさと

〒299-2507 千葉県南房総市大井 686 Tel 0470-46-8181 e\_mail info@e-makiba.jp

<p>1. かご</p> 	<p>2. 如雨露</p> 
<p>縦 63 cm × 横 84 cm × 高さ 50 cm</p>	<p>φ 55 cm × 高さ 37 cm</p>
<p>3. 石臼</p> 	<p>4. 七輪</p> 
<p>φ 28 cm × 高さ 21 cm</p>	<p>縦 24 cm × 横 24 cm × 高さ 21 cm</p>
<p>5. 羽釜</p> 	<p>6. 羽釜</p> 
<p>φ 33 cm × 高さ 22 cm</p>	<p>φ 41 cm × 高さ 25 cm</p>



7. 鍋	8. 一章枡
	
φ 35 cm × 高さ 15 cm	縦 17 cm × 横 17 cm × 高さ 9 cm
9. 飯台	10. 飯台
	
φ 52 cm × 高さ 32 cm	φ 46 cm × 高さ 12 cm
11. 臼	12. 杵
	
φ 53 × 高さ 45 cm	横 47 cm × 柄 76 cm, 横 42 cm × 柄 82 cm

13. 餅のし板・のし棒	14. 鉄瓶
	
のし板:縦53 cm×横89 cm×高さ7 cm。のし棒:長さ130 cm	φ21 cm×高さ26 cm
15. 鉄瓶	16. 銘々膳 本膳セット
	
φ18 cm×高さ12 cm	木具膳:縦36 cm×横36 cm高さ17 cm
17. 銘々膳 本膳セット	18. 銘々膳 宗和膳
	
木具膳:縦30 cm×横30 cm×高さ12 cm	縦33 cm×横33 cm×高さ19 cm



19. 組盃と盃台	20. 飯椀と汁椀
	
盃台：縦 14 cm×横 14 cm×高さ 12 cm	飯椀：φ 12×高さ 8 cm 汁椀：φ 11 cm×高さ 12 cm
21. 蕎麦猪	22. 天目台
	
φ 8 cm×高さ 6 cm	φ 16 cm×高さ 14 cm
23. 重箱	24. 7段入れ子式重ね箱
	
縦 21 cm×横 22 cm×高さ 16 cm	縦 31 cm×横 37 cm×高さ 14 cm





「日本酪農発祥之地」 嶺岡牧が育んだ味

# チッコカタメタノ 料理教室 2023'



ちょっぴり変わったチッコカタメタノ尽くし膳：ミニチッコ丼、わかめ・チッコカタメタノ・玉葱の味噌汁、ひじきとチッコカタメタノのサラダ、チッコカタメタノ肉じゃが、鯖とチッコカタメタノのぬた、みかんチッコカタメタノ

【日 時】 2023年11月13日(月) 10時～13時

【場 所】 鴨川市ふれあいセンター栄養実習室

【料 理】 ちょっぴり変わったチッコカタメタノ尽くし膳

【参加費】 1,000円(食材費)

【申込み】 千葉県酪農のさと 定員15名先着順

プロジェクト鴨川味の方舟/千葉県酪農のさと/  
NPO 法人エコロジー・アーキスケーブ

〒299-2507 千葉県南房総市大井686 TEL 0470-46-8181 e\_mail info@e-makiba.jp



千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会 2023年度第1回

「嶺岡紀行」を読んでもみませんか！

ミニ企画展

2023年10月1日発行

編集・制作 NPO法人エコロジー・アーキスケープ

発行 千葉県酪農のさと

